

兵庫県立美術館にて小企画展「吉田博 播磨造船所 絵画群」が開催されるまでの経緯

- ① 平成 2(1990)年 4 月 2 日、株式会社 I H I（＊1）の造船部門であった相生第一工場が分社独立して株式会社アイ・エイチ・アイ・アムテック[IHI AMTEC]（＊2）が発足した際に、旧 IHI 相生第一工場修理部事務所の倉庫に勤労働員学徒の作業風景（＊3）が描かれた 12 点の油彩画が保管されていることが判明し、これらの作品はアムテックへ移管された。

（＊1）昭和 35(1960)年 12 月 1 日、株式会社播磨造船所は石川島重工業株式会社と合併し、「石川島播磨重工業株式会社」が発足。平成 19(2007)年 7 月 1 日、同社は社名を「株式会社 I H I」に変更した。

（＊2）平成 25(2013)年 1 月、株式会社アイ・エイチ・アイ・アムテックは親会社の経営統合により社名を「株式会社 JMU アムテック」に変更した。

（＊3）機械工場で旋盤作業に従事している男子学徒の姿、ハンマーとタガネを使った基礎訓練を受けている男子学徒の姿、窓辺で事務仕事に従事する女子学徒の姿、絶縁体部品のやすり仕上げ作業に従事する女子学徒の姿などが描かれている。

- ② アムテックの初代社長 石津康二氏（後・吉田博展実行委員会 会長）は絵画に記されていたサイン等から調べた結果、これらの油彩画が吉田博^{よしだひろし}なる画家の作品であることを知ったが、それ以上のことは不明であった。

- ③ 平成 29(2017)年 8 月、JMU アムテック資料館で保存している造船関係資料（一般配置図、進水絵葉書、書籍類等）をデジタル化し船舶海洋工学会のホームページとリンクする一連の作業を推進したアムテックの第 4 代社長 山上和政氏（後・吉田博展実行委員会 委員）は、デジタル化のため 12 点の油彩画を撮影した。

- ④ 同時期に、山上氏は兵庫県立美術館が 2019 年 9 月に発行した「アートランブル」VOL52 に掲載された、吉田博が播磨造船所で油槽船をスケッチした旨の一文（“「1945 年±5 年」展の風景画”中の一文）をウェブサイト上で知り、さっそく筆者である同美術館の学芸員 出原均氏と面談した。

- ⑤ 平成 29(2017)年 11 月 10 日、同美術館による現物調査が実施され、出原氏よりこれら 12 点の油彩画が（アジア・太平洋戦争中に描かれた希少で）大変貴重なものであることを知らされた山上氏は、同時に同美術館への寄託という方法があることを知り、油彩画をこのまま同社に保管するのではなく、地元・相生の市民に向けて展示会を開催した後に同美術館に寄託すべきと判断した。

- ⑥ 平成 29(2017)年 10 月、IHI 相生総合事業所の書庫から総務部の宮艸真木氏（後・吉田博展実行委員会 委員）により吉田博の油彩画 3 点が発見された。これらの作品は船舶の建造風景を中心に描かれたものであった。さらに、荻俊秀氏（後・吉田博展実行委員会 委員）の調査により姫路市の日ノ本学園にアムテック保管の絵画とほぼ同一の絵画が所蔵されていることが判明した。

⑦ 平成 29(2017)年 11 月、12 点の油彩画はいずれも前記のとおり大変貴重なものであることから、県立美術館へ寄託するのに先立ち地元・相生での展示会を開催すべく相生市長に相談したところ、快く同意を得た。

⑧ 平成 30(2018)年 1 月 12 日、旧播磨造船所出身の 5 名からなる吉田博展実行委員会（＊1）の第 1 回委員会が開催され、展示会を開催することが決定。平成 30(2018)年 6 月 21 日（木）～7 月 2 日（月）の間、相生市文化会館 扶桑電通なぎさホールにて吉田博展「相生における吉田博画伯」－戦時下の播磨造船所風景－（＊2）が開催される運びとなった。

（＊1）吉田博展実行委員会のメンバー

会長 石津 康二（昭和 33 年 播磨造船所入社）
委員 山上 和政（昭和 43 年 石川島播磨重工業入社）
荻 俊秀（昭和 49 年 石川島播磨重工業入社）
宮舛 真木（昭和 49 年 石川島播磨重工業入社）
水野 昌芳（昭和 60 年 石川島播磨重工業入社）

（＊2）共催： 株式会社 IHI 相生事業所、株式会社 JMU アムテック

後援： 相生市、相生市教育委員会

※平成 30(2018)年 4 月、相生市内での吉田博展開催のフライヤー（チラシ）を相生市全戸に配布した際に、旧播磨造船所幹部の自宅に合計 6 点の油彩画が所蔵されていることが判明。その後、展示会を訪れた家島（相生からランチ[機艇]で 40 分程度の島）在住の方の自宅に油彩画 1 点が所蔵されていることが判明し、吉田博が家島に渡って（次男・穂高が同行）風景画を描いていたことも確認された。

展示会には個人・学校等の団体から協力を得た油彩画・版画を含めた 23 点の作品が揃い、さらに県立美術館の出原氏から紹介された吉田博のご令孫で画家の吉田亜世美氏より提供された播磨造船所でのスケッチ画のハードコピーもあわせて展示された。展示会の会期は短期間であったにもかかわらず造船所の元従業員を始めとする 1,539 名もの方々が来場され、反響の大きさと吉田画伯の人気の高さが示され成功裏に閉会した。

⑨ 相生での展示会終了の翌日、すでに県立美術館にて審議の上受入れが決定していた JMU アムテック保管の 11 点（全 12 点の内 1 点はアムテックの社内に保管することが決定）、IHI 相生事業所保管の 3 点、個人（旧播磨造船所の幹部）保管の 1 点の計 15 点の作品が同美術館に搬入され、寄託手続きが完了した。

⑩ その後も、吉田博展実行委員会のメンバーは造船所に残された当時の建造線表（工程表）、工場配置図、絵画中の山容や作業員の服装、吉田亜世美氏より提供されたスケッチ帖等を参考にして、各絵画の作画場所や作成時期、絵画中の船舶や人物等の特定に注力した。また、相生の近隣各地で新たに発見された絵画の調査に加えて、播磨地方における吉田博の足跡を確かなものにするため山上、荻の両氏は熱海の吉田家別荘を訪れ、保管されていた吉田博のスケッチ帖の内 9 冊の調査を行った。

播磨造船所および地元・相生に対する熱い思いを抱いた吉田博展実行委員会のメンバーが、造船の専門家としての眼力と熱意をもって調査に当たった結果、播磨造船所とその後継造船所に関わって来た方々にしか分からない事柄が数多く発見された。

とりわけ、それまで長い間不明であった、アジア・太平洋戦争中の昭和 18(1943)年から昭和 20(1945)年にかけての吉田博の足跡と業績がほぼ解明されたことは特筆すべきことであった。

- ⑪ 実行委員会は絵画の探索、地元での展覧会の準備と実行、追跡調査、編集作業等におよそ 1 年半を費やした後の平成 31(2019)年 3 月、それまでの調査・検討結果を「相生『吉田博展』その後 ―播磨における吉田博の足跡―」としてまとめ上げ、上梓した。(A4 版フルカラー印刷、本文ページ数 58、編集者：吉田博展実行委員会、発行者：株式会社 JMU アムテック・史料館)
- ⑫ 平成 31(2019)年 4 月、実行委員会のメンバーは吉田亜世美氏から自宅倉庫（東京都三鷹市）の建て替えを機に、膨大な数の吉田博のスケッチ画（未開封の箱 5 箱）の中から相生近辺のスケッチ画が 200 点余り発見されたとの連絡を受けた。
- ⑬ 令和 2(2020)年 1 月 21 日、山上氏と県立美術館の出原氏がこれらスケッチ画の確認のため吉田亜世美氏の自宅を訪れ、調査会メンバーの協力を得て膨大な数のスケッチ画をジャンルごとに仕分けし、500 枚を超える画像データを撮影した。

持ち帰った画像データを分析した結果、最も大量に描かれていた勤労働員学徒のスケッチ画からは播磨造船所に昭和 19(1944)年に動員された動員校 24 校の学徒すべてが描かれていたこと、勤労働員学徒が配属された職場は造船工程のすべてに及んでいたこと、播磨造船所本社工場以外にも日の浦工場や当時最高の軍事秘密であった松の浦工場（*）も描かれていることなど、新たな発見が相次いだ。

（*）昭和 18(1943)年、海軍艦政本部から第 2 次戦時標準船として「改 E 型貨物船」（後に「改 E 型油槽船」に変更される）年間 100 隻の急速建造可能の造船工場新設の特命を受けた播磨造船所は、相生市松の浦の市有埋立地に同造船所の指定請負人となっていた大本百松率いる大本組による船の建造を進めつつ昼夜兼行で工場の建設を進めるという突貫工事により松の浦工場を建設し、年間 100 隻を目標に船の建造に従事。播磨造船所は、同時に建造を受注した石川島重工業、三菱重工業、川南工業の各社を凌駕する実績をあげた。

IHI 相生総合事業所の書庫から発見された最大の絵画（80.0cm×131.0cm）は当初本社工場の「第 7 船台建造風景」と思われていたが、新たに発見された松の浦工場のスケッチ群により「松の浦工場東船台」であることが明らかにされた。また、実行委員会のメンバーは絵画やスケッチ画を基に動員学校 24 校と勤労働員学徒の作業場を特定した。

さらに、動員学徒の入社日、絵画やスケッチ、美術展出品作品、各スケッチ上の記述、吉田博の長男・遠志の寄稿文、次男・穂高の葉書文を基に、建造線表（工程表）に吉田父子の動静を推定記入することにより、吉田父子が昭和 18(1943)年夏から昭和 20(1945)年冬まで長期にわたり播磨地方

に滞在していたことが判明した。ちなみに、実行委員会のメンバーは相生での吉田博の定宿を「水月別館」と推定している。

- ⑭ 令和 2(2020)年 8 月、実行委員会は新たに大量に発見されたスケッチ画等から「相生『吉田博展』その後」に記述した内容から変更もしくは追加すべき点が多々明らかになったことから、「続・相生『吉田博展』その後 ―吉田博の播磨造船所勤労学徒への熱いまなざし―」を上梓した。(A4 版フルカラー印刷、本文ページ数 52、編集者：吉田博展実行委員会、発行者：株式会社 JMU アムテック・史料館)

なお、県立博文館の出原均学芸員の言を借りれば、実行委員会が上梓した 2 冊の調査誌は第一級の資料的価値を持つと言える。

- ⑮ 小企画展「吉田博 播磨造船所 絵画群」が本年、令和 2(2020)年 10 月 10 日（土）～12 月 27 日（日）の間、兵庫県立美術館にて開催される運びとなった。

作品点数は JMU アムテック、IHI 相生事業所および個人（旧播磨造船所の幹部）から同美術館へ寄託された、アジア・太平洋戦争中の播磨造船所の勤労働員学徒の作業風景および船舶の建造風景などを描いた油彩画 15 点を含む吉田博の絵画 22 点余り、吉田亜世美氏から提供された下絵（スケッチ画）数十点が予定されている。

兵庫県立美術館での小企画展「吉田博 播磨造船所 絵画群」の開催決定は、吉田博展実行委員会のメンバー全員の播磨造船所、地元・相生に対する熱い思いが同美術館の出原均氏、吉田博のご令孫の吉田亜世美氏との奇跡的ともいえるべき出会いにつながって行ったこと、さらには、吉田家の方々、美術関係者、かつての学徒動員学校、相生市を始めとするすべての関係者の献身的な協力が相まって実現したものと言えよう。

※記述内容の出典：株式会社 JMU アムテック・史料館発行の「相生『吉田博展』その後」と「続・相生『吉田博展』その後」

以 上
(2020.10.4)